

Title	On the nature of lexical access in word production : evidence from errors in speech by adult speakers and aphasic patients(Abstract_要旨)
Author(s)	Saito, Akie
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2005-05-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/144561
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏名	さいとう あきえ 齊藤 章 江
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第46号
学位授与の日付	平成17年5月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目	On the nature of lexical access in word production : Evidence from errors in speech by adult speakers and aphasic patients (単語産出における語彙アクセスの性質について：成人と失語症患者の発話におけるエラーからの証拠)
論文調査委員	(主査) 教授 吉川左紀子 教授 子安増生 助教授 楠見 孝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、健常成人の言い間違いや失語症患者の言語障害の分析などを手がかりとして、単語を発話する心的過程(単語産出過程)の特性を実証的に明らかにすること、さらにそれらを手がかりに、失語症患者に対する適切な言語訓練法を提言することを目的として行われた研究をまとめたものである。第1章では、語彙アクセスに関する2つの代表的な理論モデルを取り上げて、それぞれのモデルの特徴について比較検討し、第2章と第3章では1章で取り上げた2つのモデルについて、実験的検討を行った。第2章では、失語症患者を対象として語彙検索課題を行い、語彙検索を促進する手がかりの特性を検討した。第3章では、単語の言い間違いにみられる「initialness effect」を取り上げ、語彙アクセスにおける単語の内容と構造の関係を分析した。さらに第4章では、伝導失語の音韻錯語の原因に関する2つの仮説をとりあげて失語症患者を対象に実験を行い、音韻出力機構の表象不安定説を支持する結果を得た。第5章では、各章のまとめと今後の研究方向に関する総括を行っている。

なお、本論文は欧米の心理学専門誌に発表された研究成果を中心に、英語で執筆されている。

各章の概要は以下の通りである。

第1章では、単語産出過程における語彙アクセスに関する2つのモデル、分離モデルと相互活性化モデルについて比較検討を行っている。語彙アクセスは、レンマ(単語の意味と統語情報を含む表象)選択と音韻の符号化の2段階からなるが、この2つの段階が相互に影響しあうか否かに関して、2つのモデルの仮定は異なっている。そこで、これらのモデルの妥当性を実験的に検討する方法を提案し、さらに語彙アクセス段階で単語の内容と構造が分離しているか否かに関しても、実験的な検証方法を提案している。さらに、以上のような理論モデルの検証が失語症にみられる言語障害の理解にとってどのような貢献をなしうるかを議論している。

第2章では、失語症患者の語彙検索障害に焦点をあて、線画の命名という単語検索を含む課題をおこなうときに、意味手がかりと音韻手がかりを与えて、それぞれが検索を促進するか否かについて検討している。11名の失語症患者が実験に参加した。実験の結果、音韻手がかりによる促進効果をもっとも顕著であるが、意味手がかりによる有意な促進効果がみられることが分かった。この結果から、語彙アクセスの2段階は相互作用的であるという説が支持されたといえる。

第3章では、語彙アクセスにおける単語の内容と構造の関係を検討するために、単語発話時に生じる言い間違いにみられる「initialness effect」を取り上げて検討した。この効果は、単語あるいは音節の最初の音がエラーしやすいという現象であり、英語における initialness effect は、英語の音節内の階層構造が原因で生じるとする説が支持されてきた。日本語にはこうした音節内の階層構造がないため、日本語でもこの効果がみられれば、従来の説は再考を要することになる。実験の結果、日本語においても initialness effect がみられ、英語のシラブル構造がこのエラーの原因ではないこと、むしろ、単語内の各音同士のつながりの経験頻度によるバイアスが重要であることが示唆された。

第4章では、1名の伝導失語症患者を対象に単語復唱課題を行い、音韻配列が単語に近い非単語と、そうでない非単語にお

ける復唱成績を比較した。それによって、伝導失語の音韻錯語の原因に関して、音韻表象不安定説と音韻プランニング障害説のいずれが妥当であるかの比較検討を行った。その結果、音韻配列が単語に近い非単語において復唱成績がよいことが示され、音韻プランニング障害ではなく、音韻表象不安定説による予測と一致する結果が得られた。さらに第4章では、これらの結果や他の失語症患者を対象とした研究結果に基づいて、伝導失語患者に対する言語訓練法を考案し、その妥当性を検討した研究について紹介している。

第5章では、第1章から第4章までの研究をまとめ、論文全体の成果について論じている。

論文審査の結果の要旨

意図した言葉を正確に発話する能力は、言葉を理解する能力と並んで、人のコミュニケーション能力の基盤となるもっとも重要な心理機能1つであるといつてよい。意図した言葉を発する心的過程、すなわち単語産出過程に関しては、これまで多くの実証研究が行われ、単語を読む、線画で描かれた事物の名前を言う、他者の発した単語を復唱する、といったさまざまな認知課題の成績を指標として理論的、実証的な検討が進められてきた。本論文では、従来の研究で提案されている語彙アクセス過程に関する2つの理論モデルの論争点を詳細に分析し、健常者および失語症患者が単語を発話する際に示す「エラー」の数や性質に着目した心理実験によって、それら理論モデルの妥当性について検討した。

本論文では、語彙アクセスの理論モデルから得られた示唆が、失語症患者の言語訓練にとっても役立つこと、また、逆に、失語症患者の示すさまざまな発話エラーの特徴が、語彙アクセスの理論モデルの精緻化に役立つことが示された点が高く評価される。より具体的には、以下の点を指摘しておきたい。(1)多くの先行研究の結果を丹念に読み解き、複数の理論モデルの妥当性を比較検証するための実験の要件を正確に抽出したこと、(2)統制のとれた実験手法を工夫し、明瞭な実験結果を提示していること、(3)単語産出過程に関する理論モデルや実証的研究成果に基づいて、失語症患者の言語訓練に有効な具体的方法を提案していることである。

従来の単語産出過程に関する研究成果の多くは、理論モデルを含めて、英語話者を中心とする欧米の被験者のデータに基づいて構築されたものであり、日本語話者を対象とした研究成果の数は限られている。その意味でも、本論文の成果がもたらす貢献は大きい。たとえば本論文の第3章では、発話エラーの「initialness effect」について検討し、日本語話者においてもこの効果が見られることを示している。英語と日本語では、単語の音韻構造が異なるため、これまで提案されてきた発話エラーの説明モデルの中には、日本語での initialness effect の生起を予測しないものがあった。本論文での検討によって、こうしたモデル間の比較検討が非常に有効に行われたと評価できる。

第1章では、単語産出の理論モデルである分離モデルと相互活性化モデルについて詳細に比較し、どのような実証手続きによってそれらのモデルの妥当性に関する評価が可能かを考察した。さらに、失語症の言語障害を理解するうえで、単語産出過程に関する理論的検討がどのような意味で重要かを論証し、適切な言語訓練プログラムを考案するうえでの理論モデルの有効性を議論している。

第2章では、第1章で示した2つの理論モデルの妥当性を比較検討するために、失語症患者が喚語困難を示す単語に対し、どのような手がかりを与えることで発話が促進されるかを、複数の手がかりの効果を比較して検討した。この実験的検討により、従来から言われていた音韻手がかりの有効性に加えて意味手がかりの有効性も確認されたことは重要であり、失語症患者の言語訓練にも応用することが可能な成果といえる。

第3章では、単語発話の言い間違いにみられる「initialness effect」を取り上げて検討した。この効果は従来、英語の音節内の階層構造の特徴に由来するエラーとされてきた。実験の結果、日本語においても initialness effect がみられたことから、英語のシラブル構造がこのエラーの原因ではないことが立証された。

第4章では、1名の伝導失語患者を対象に単語復唱課題を行い、伝導失語の音韻錯語の原因に関する2つの説明モデルの比較検討を行った。結果は、音韻表象不安定説と音韻プランニング障害説という2つの説明モデルのうち、音韻表象不安定説による予測と一致するものであった。さらに、これらの結果や先行研究に基づいて伝導失語の患者に有効な訓練法を考案し、その妥当性を検討した研究を紹介している。

以上のように、本論文は、単語産出過程の理論モデルの精緻化という基礎研究としての成果および失語症患者への適切な

言語訓練法の提案という応用面での成果のいずれにおいても高く評価できる内容である。

一方、扱っているのが単語の発話過程のみであり言語発話研究としてはまだ不十分であること、英語と日本語の差異など、異なる言語間の相違点や共通点に関する議論がやや不十分であることなどが指摘された。しかしながらこうした点は、本論文で試みられた丹念な検討やその成果として得られた新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成17年4月11日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。